



令和3年9月19日 奥都城秋季大祭・役員のみで神事行う



発行所

大牟田・荒尾地区与論会  
発行人・朝岡光男  
TEL 0944-56-7510

第132号



新年あけましておめでとございます。

昨年は、新型コロナウイルスに振り回され、オリンピックも終わり、今年は明るい年になるよう祈るばかりです。

新型コロナウイルスの「第6波」が言われておりますが、感染対策を続けることが大事ではないでしょうか。検温・消毒や屋内での密を避けながらお参りください。

初詣を左記の通り行いますので、よろしくお願いいたします。

一、とき 1月3日(月) 午前10時～12時

一、ところ 与洲奥都城前広場

**注意事項**

『検温』『消毒』を実施。必ず『マスク着用』。

奥都城内は三密「密閉空間・密集場所・密接場面」にならない様お願いします。

# おおはらえのことば 大祓詞

たかまのほら かむつま ま すめらがむつ かむろぎ かむろ み 命 以ちて 八百萬神等を神集えに集え賜ひ神議りに議り賜ひて我が  
 高天原に神留り坐す 皇親 神漏岐神漏美の命 以ちて 八百萬神等を神集えに集え賜ひ神議りに議り賜ひて我が  
 すめまのみこと とよあしほらのみずほのくに やすくに たいら し 知ろし 食せと事依さし奉りき此く依さし奉りし國中に荒振る神等を  
 皇御孫命は豊葦原水穂國を安國と平けく知ろし食せと事依さし奉りき此く依さし奉りし國中に荒振る神等を  
 ば神問はしに問わし賜ひ神掃ひに掃い賜ひて語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて天の磐座放ち天の八重  
 雲を伊頭の千別きに千別きて天降し依さし奉りき此く依さし奉りし四方の國中と大倭日高見國を安國と定め  
 奉りて下つ磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知りて皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて天の御蔭日の御蔭と  
 隠り坐して安國と平けく知ろし食さむ國中に成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は天つ罪國つ  
 罪許許太久の罪出でむ此く出でば天つ宮事以ちて天つ金木を本打ち切り末打ち断ちて千座の置座に置き足らは  
 して天つ菅麻を本刈り断ち末刈り切りて八針に取り辟きて天つ祝詞の太祝詞事を宣れ此く宣らば天つ神は天の  
 磐門を押し披きて天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて聞こし食さむ國つ神は高山の末短山の末に上り坐して  
 たかやま いぼりひきやま いぼり 掻き 別けて 聞こし 食さむ 此く 聞こし 食して 罪と 言ひ 罪は 在らじと 科戸の 風の 天  
 高山の伊褒理短山の伊褒理を掻き別けて聞こし食さむ此く聞こし食しては罪と云ひ罪は在らじと科戸の風の天  
 やへぐも ふ はな こと ごと あした みぎりゆうべ みざり あさかせゆうかせ ふ ほら こと ごと おおつべ お おおふね へと はな  
 の八重雲を吹き放つ事の如く朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂う事の如く大津邊に居る大船を舳解き放  
 ち艦解き放ちて大海原に押し放つ事の如く彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌以ちて打ち掃ふ事の如く遺る罪は在ら  
 じと祓え給ひ清め給ふ事を高山の末短山の末より佐久那太理に落ち多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比賣と言ふ神  
 おほうなばら も い こと たかやま すえひきやま すえ 荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都比賣と言ふ神  
 大海原に持ち出でなむ此く持ち出で往なば荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都比賣と言ふ神  
 持ち加加呑みてむ此く加加呑みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と言ふ神根國底國に氣吹き放ちてむ此く氣吹き放  
 ちてば根國底國に坐す速佐須良比賣と言ふ神持ち佐須良ひ失ひてむ此く佐須良ひ失ひてば罪と言ひ罪は在  
 らじと祓へ給ひ清め給ふ事を天つ神國つ神八百萬神等共に聞こし食せと白す

## 新年あけましておめでとうございませす。

会員の皆様におかれましては、ご家族お揃いで輝かしいお正月をつつがなく新しい年をお迎えのことと心よりお喜び申し上げます。昨年、新型コロナウイルスの影響で春・秋の祭典が中止になりましたが、秋季大祭では多くの会員さん達が来られ、コロナ禍対策をして先祖のお参りをさせていただきました。

コロナ禍の影響で与論島にも旅行できないなか、当日はテレビを設置してDVDによる「黒いダイヤは見ていた」三池炭鉱・与論からの移住120年、「与論今昔写真画像」「与論島観光PR画像」を映して先人達が歩んだ歴史や生活環境・与論の素晴らしい風景を見ていただきました。今後とも継続していきたいと思っております。現時点では緊急事態宣言は解除されていますが、まだまだ油断できない状況です。今年は、皆様方と一緒に参りを出来るのを願うばかりです。

今年度は、今まで「与論会だより」に取り上げた懐かしい写真や皆様方から寄せて頂いた写真を拡大して写真展と一緒に開催したいと思っております。また、まだ先のことですが「与論からの移住125年」に当たる令和6年には先祖が生まれ育った与論島ルーツを訪ねて訪問企画したいと思っております。

今後、先人達の誇りをもって地域社会の発展に貢献寄与できる大牟田・荒尾地区与論会として役員一同一丸となりお世話させていただきます。

本年も会員の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈りすると共に、今後とも与論会活動に対するご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます、新年のご挨拶といたします。

令和四年 元旦



大牟田・荒尾地区与論会

会長 朝岡 光 男

11月14日 清掃



10月10日 清掃



9月12日 清掃



7月18日 清掃



### 与論会の動き

自 令和3年9月  
至 令和3年12月

9月12日 奥都城清掃 1・2地区担当

19日 奥都城秋季大祭 役員のみで神事行う

お参り約250人

10月10日 奥都城清掃 12・20地区担当

11月14日 奥都城清掃 7・8・9地区担当

▼次の方がお亡くなりになりました(敬称省略)

謹んで哀悼の意を表し心からご冥福をお祈り申し上げます

月日 氏名 年齢 喪主 住所  
11月12日 柳田 秀吉 96歳 柳田 フミ 荒尾市大平町2-50-7

### 秋季大祭

今回も新型コロナウイルス感染対策として秋季大祭の神事は役員のみで行いましたが、お参りに約250人の方々がお見えになりました。

左記の皆様からご寄贈がありましたのでご報告いたします。

1万円	下川 博子様	3千円	堀 泰博様
1万円	白雲 社様	3千円	竹 稔範様
5千円	(有)仲野装業様	清酒2本	白雲 社様
5千円	(有)山 運様		

## 令和3年 秋季大祭



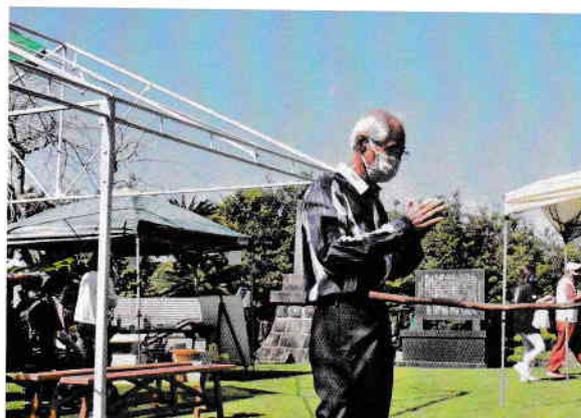
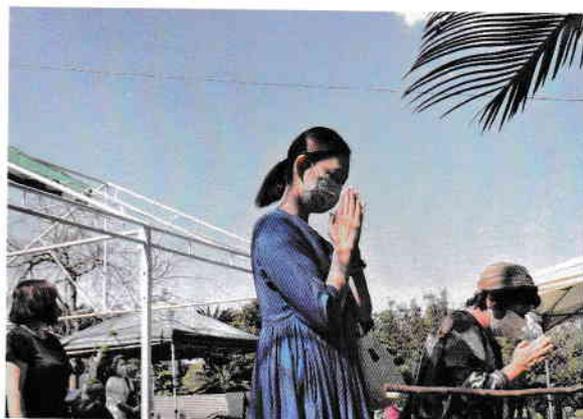
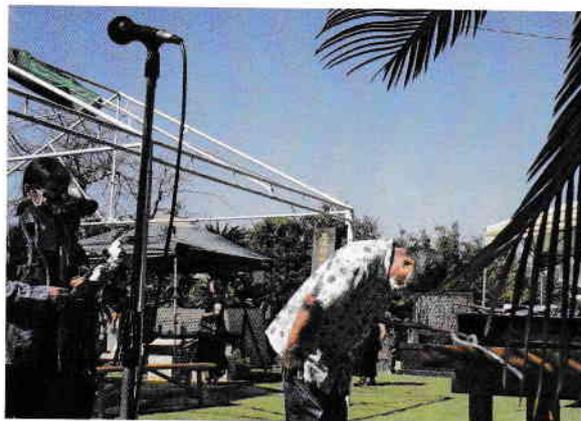
役員一同郷土選拝



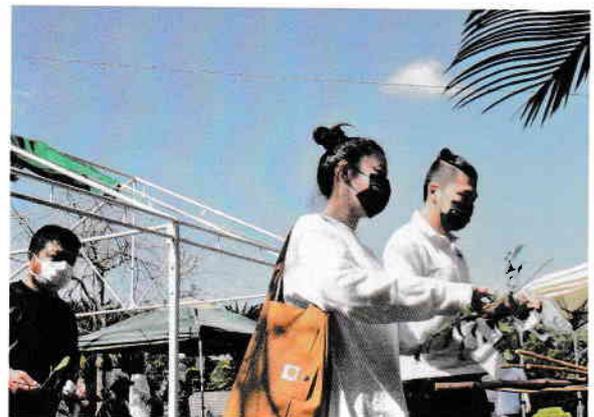
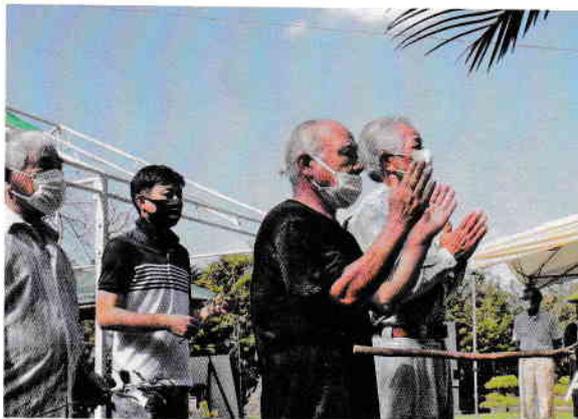
田尻神主と役員のみで神事



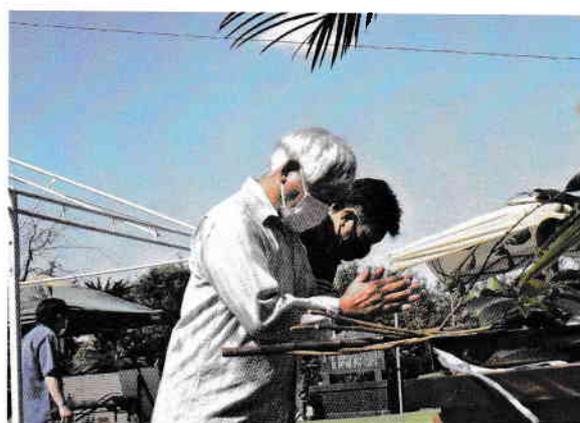
## 令和3年 秋季大祭



## 令和3年 秋季大祭



## 令和3年 秋季大祭



入口での検温・消毒

## 白いビーチ覆う灰色の軽石 観光と 漁業の島・与論から悲鳴「打つ手ない」

小笠原諸島の海底火山噴火で発生したとみられる軽石漂着で、与論島の漁業や観光が打撃を受けている。「打つ手がない」「美しいビーチが黒や灰色になるなんて」。漁師やマリインレジャー業者から悲痛な声上がる。

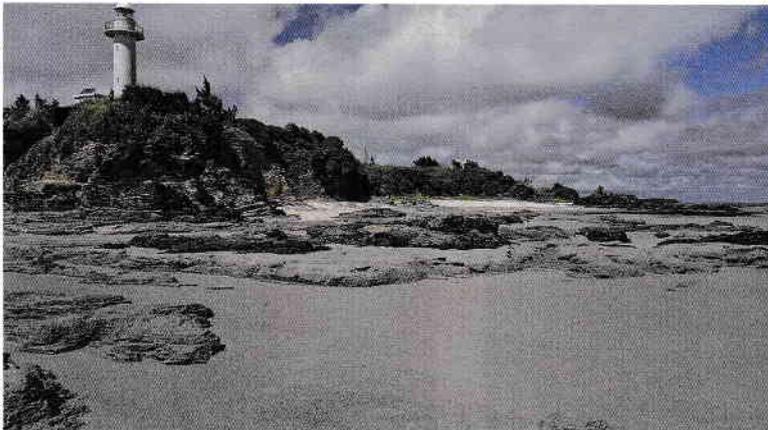
11月10日、約20<sup>キ</sup>ある島の外周をレンタカーで回った。量の差こそあれ、すべての海岸に軽石が流れ着いていた。人影はない。拳大から粒状のものに一面覆われたビーチもあった。

場所によってはエメラルドグリーンの海に濃い灰色の塊が帯状に混ざっているのが見えた。住民は「4、5日前はもっとひどかった。南風が変わってから漂流は消え始めている」と口をそろえる。だが、「北風が吹けば再び押し寄せるのでは」と不安は残る。原田譲二さん(45)は10月末と今月初めに漁に出たものの、吸水口に軽石が詰まり、30分足らずで引き返した。1日にソデイカ漁が解禁され書き入れ時。「漁に出られず無収入。すぐにでも出漁したいのに」と落胆する。

与論町漁協によると、約100隻のうち、出漁しているのは3、4隻のみ。この数日は荒天も追い打ちを掛けている。漁協近くで鮮魚を提供する飲食店をのぞくと、すしネタを入れる冷蔵ケースは空っぽになっていた。

主要産業の観光にも影を落とす。シュノーケリングやグラスボートのツアーを企画する鬼塚直俊さん(62)は軽石のない場所を探して楽しんでもらっている。「美しい海とビーチをイメージし

て来る観光客が多い。自然災害だけに仕方ない」  
本園秀幸さん(48)はグラスボートが故障する恐れがあるため、営業を見合わせている。「オフシーズンなのが不幸中の幸い。軽石がなくなるまでは再開できない」と予約の電話が入っても断っている。



写真は風来坊さんのブログより引用しております。

## 軽石漂着 「減ってもまた来る」 与論で2000立方メートル回収 業者 「年内いっぱいかかるかも」

小笠原諸島の海底火山噴火で発生したとみられる大量の軽石が奄美群島や沖縄県に漂着している問題で、与論町では町内の建設会社5社が1日からパワーショベルなどの重機で回収作業をしている。9日までに約2000立方メートルを除去したが、業者は「減ったと思ったら、また押し寄せてくる」とため息をつく。

県と結んだ大規模災害協定に伴い実施。島西岸の茶花地区にある港の船揚げ場などにたまった軽石を重機7台で取り除き、仮置き場へ運んでいる。

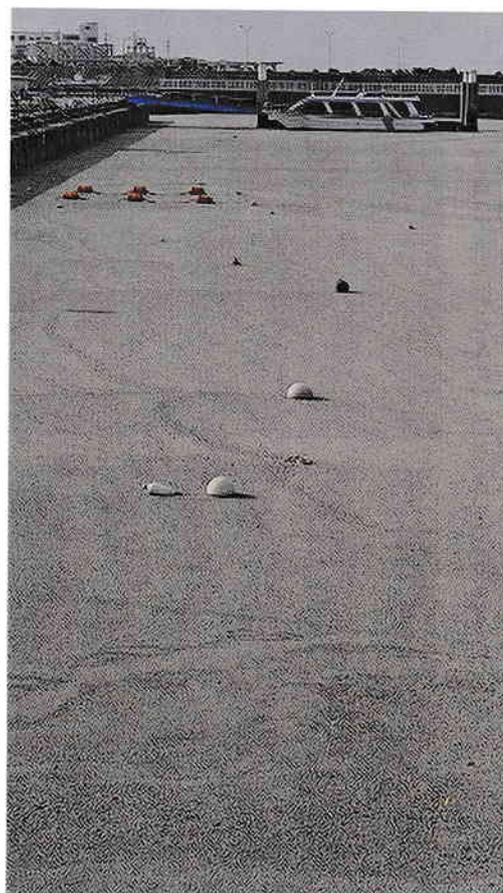
川畑建設の川畑進愛(のぶよし)社長(50)は「6日以降は風向きの関係で、沖へ流れ出たが、風向きが変わればまた押し寄せる。年内いっぱいかかるかもしれない」と長期戦を覚悟する。

町によると、食料品などを積んだ定期フェリーは漂着が比較的小さい南西岸の供利地区にある港に接岸するため、生活物資への影響は出ていない。

島には15日以降、ガソリンや発電用重油、プロパンガスを積んだタンカーが相次いで入港。タンカーが海からエンジン冷却用水をくみ上げる際、軽石を取り込み故障する恐れがある。

14日の作業は天候不良時には延期する。九地整の担当者は「与論島の軽石回収がうまくいけば、他地域での(整備船やフェンスの)活用も考えている」と話した。

南日本新聞 11月22日



## 軽石回収船 引き返す

### 与論島ではマリネレジャーに影響

鹿児島県の与論島に大量の軽石が漂着している問題で、国が軽石回収のため派遣した船は、16日に続き、17日も天候不良のため途中で引き返しました。島では、観光の目玉であるマリネレジャーにも影響が出ています。

与論島の東側に位置する大金久海岸は、島を代表する観光スポットですが、白い砂浜が帯状に広がる黒い軽石で覆われ、3年前の同じ場所と比べるとその差は一目瞭然です。

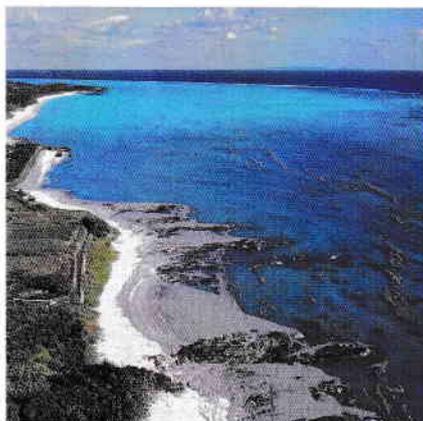
(プリシアリゾートヨロンマリネレジャー担当・伊佐直恭さん)「与論の白い砂浜にこういった黒いものがあるということは、与論のイメージが悪くなる。これだけ撤去するのはマンパワーだと大変」

(県外から訪れた観光客)「景色が変わった気がするが、海に残ってなくてよかった。真っ白なビーチが戻ってくれたら」

小笠原諸島の海底火山の噴火による大量の軽石は、島の観光の目玉、マリネレジャーにも影響を及ぼしています。

干潮時に沖合に出現する百合ヶ浜。サンゴ礁や魚を眺めながら浜に渡るグラスボートが年間を通して運航していますが、軽石でエンジンが故障するなどのトラブルがあり、運航する8業者のうち5業者が休業しています。

南日本放送 11月17日 放送



## 上野正夫著

## 与論島に生まれて

## —わが島育ち人生—より抜粋しました

## 一、上間殿内

昭和60年8月21日、わたしは郷里与論島(奄美諸島の南端)に帰り、城区の中央に位置する上野家累代の屋敷跡「上間殿内」を訪れた。

屋敷の周囲を囲う石灰岩の石垣は風化し、所々半壊している。亜熱帯樹ガジュマルが天を覆い、錯綜した枝から無数の気根が垂れ下がって風に揺れている。石段造りの門口の両側から伸びた二本の榕樹(ガジュマル)が幹の中ほどで絡み合って癒着し天然のアーチを形成している。隣り合わせた一連のフクギが黒い幹から幾段にも枝を広げ、亭々と中空へ伸び、根元に濃い樹陰を作っている。

かやぶきの木造母屋とそれに寄り添うトーグラ(母屋と対をなす小屋)は跡形もない。ここは与論町文化財分布図にウプスー(大主)といわれた豪族の琉球式屋敷跡と記されている。早速、復元工事を行った。

## 二、家族構成

上野應介は安政元年(1854)10月23日、父・上野富忠の長男として上間殿内で呱呱の声を上げた。当時、上野家は約10平方

キロ手口の土地を所有し、島内随一の名門として聞こえていた。

應介には可孝と喜久貞、千代(異母兄弟)の3人の子がいた。

後日、應介は先妻と別れて大島郡名瀬村の弁護士小牧寅熊の姉・為鶴と結婚した。長男可孝は甲種船長になった。小牧寅熊の長女クニをめぐり二女を設けた。長女八寿子は入夫の黒田正夫との間に三児を得た。次女従子は早死にした。應介の次男・喜久貞は千賀家に入り甲種船長、次いで長崎市港湾課長を務めた。長女千代は東元良に嫁した。

## 三、教育事業に取り組む

上野應介は容姿端麗で、胸元に届く美髯を蓄え、その魅力的な風貌は島娘のあこがれの的となっていた。彼は天分に恵まれ、明敏と機略、決断と実行力に富み、旺盛な開拓魂と卓抜の政治的手腕をもって黎明期の島に新風を吹き込んだ。情義を兼備した強力なリーダーとして衆望を一身に集めていた。

若くして社会的活動に意欲を燃やし、先見性を駆使して島の立ち後れを打破しようと、時の流れを先取りして新機軸を打ち出した。つとに着目し傾注したのは教育事業である。

明治8年、21歳のとき、民家を借り受けて学習塾を開設し、教師5人を置いて部落の子弟に読書、作文、習字、そろばんなどを教えさせた。自らも二等教師として教べんを執った。

明治11年、校舎を新築して生徒数を90余人に増やした。明治13年、27歳の時戸長(村長)に就任する。島は台風の通路に当たっていて、校舎がもつとも風害を受ける。上野は校舎を確保するために台風と辛抱強く闘った。

- 1、明治22年、校舎が台風で倒壊したが、明治二十四年に新築した。
- 2、明治28年、校舎は再び台風で吹っ飛んだ。今度は沖縄からベテラン大工、新垣三郎を招いて縦十五間(約27メートル)横五間(9メートル)の頑丈な校舎を建てた。
- 3、明治30年4月、女子の学校入学を認めた。
- 4、明治31年7月、自信をもって建てた新築の巨大校舎は未曾有の大暴風雨で倒壊した。
- 5、明治34年、風害の少ない地を選び、川渡りに校舎を新築した。

#### 四、海運に手を伸ばす

上野戸長は与論島を中心とする離島間の海上交通の開発にも着手した。明治22年、朝日丸(百トン級)を購入して与論島と近隣諸島との交通を開いた。明治27年、海運会社大航興業(株)を設立し、平安丸、隆盛丸、南洲丸、海竜丸、萬歳丸などを逐次購入、またはチャーターして近海航路に就航させた。

隆盛丸は台湾北部の淡水港外に座礁・難破して救出不可能になった。その他の船も明治31年7月の大暴風雨で全滅した。

#### 五、民生対策

- 1、明治14年、地租改正・地価修正を行った。
- 2、明治18年、村医制を創設した。
- 3、明治23年、龍踊り奉納祭を復活した。
- 4、明治30年、警察官駐在所を設置した。
- 5、明治32年、シニユグ祭り(豊作を祈り、疫病神を祓う祭)を

復活した。

- 6、ハミゴー遊びを勧奨した。(旧正月5、7日に島の南側海浜の草原・岩窟地帯で老若男女が蛇皮線・太鼓、学童たちが杭打ち遊びをして楽しむ行事)
- 7、毎年旧暦正月2日から10日の期間、一戸当たりの株数を定めてソテツ植えさせた。そのほか、アダン、カヤなどの植付けを奨励した。(カヤは屋根葺き用)
- 8、報功農事小組合を組織し、畜舎、堆肥舎、下水溜め、大小便所の水肥溜めなどの三和土へたたき)設備の競争会を催し、賞品・褒賞で村民にやる気を起こさせた。
- 9、全島を瀬利覚、茶花、朝戸、古里、中間、麦屋の六カ村に区分した。従来の按役を廃止し、惣代を置いて島の行政に当たらしめた。

#### 六、生き地獄との闘い

##### ―□之津への分村移住―

明治31年7月、空前の大暴風が島を襲った。年頭に建てたばかりの巨大校舎はひとたまりもなく壊滅した。倒壊した民屋は数えきれない。大航興業(株)の持ち船は全滅した。干ばつ、ききん、疫病などが災害に追い打ちをかけた。主食のサツマイモは枯れ果て、代用食のソテツの実を食べた。それも底をついたのでソテツの幹を削って腐らせ、食用に供したという。

生のソテツの実には有毒である。解毒には水が要る。干ばつ、渇水のため解毒用水が足りない。そのため中毒死する者や餓死する者が続出した。人々は埋葬する体力・氣力を失って死体をこも包みにして風葬に付した。岩陰に骸骨の山積みができる。死臭が潮

風に乗って漂う。島は死霊のさまよう生き地獄と化した。最高責任者である上野戸長は苦悶の極に立たされた。

災害の年(明治31年)、日根野侍従武官が勅使として下島救助金三千円を下賜された。随行の大島島司・福山広は島の惨状に驚き、対策を協議するため鹿児島県庁を訪ねた。ここで、人夫募集に来ていた三井物産(株)口之津支店長浅野長七と巡り合う。福山と浅野は救済策として口之津での石炭荷役人夫を与論から募集することに合意した。

上野戸長は窮余の一策として福山広の勧告を受けて立った。島内を奔走して希望者を募り、相当の人数を集めた。次のように長崎県口之津港への分村移民団を組織し、実行に移した。

- 一、第一団、明治32年2月、団長東元良(上野の女婿、25歳、村役場書記) 団員 250人
- 二、第二団、明治33年、団長川南行実(村役場書記)、団員100人
- 三、第三団、明治34年、団長上野應介、団員400人 合計750人

上野は21年間務めた戸長職を辞し私財をなげうち最後の集団を率いて島を出る決意をした。出発前に村役場を風水害の少ない場所下川平に移した。徳之島から梅山藤里を招聘して後任戸長に据えて後事を託した。時に應介は48歳。

当時の島の人口は約7000人と推定される。口之津へ移住した者は家族を含めて島民のほぼ五分の一に当たる1200人余りであった。

上野戸長が与論を出立するときの島民の熱狂ぶりは増尾国恵編述『与論島郷土史』に次のように描かれている。

翁の出発するや島民はあたかも慈父を失える如く離別を惜み敬慕の念に燃え上がり。茶花港を埋めたる島民は手に手に日章旗を打ち振り、萬歳の轟きははしけの見えなくなるまで響き渡り、あたかも出征軍人を送るが如き観を呈したり。

## 七、苦役の口之津

島での塗炭の苦しみからの解放を夢見てきた移民団を口之津で待ち受けていたのは牛馬にも劣らぬ苦役であった。三池港は遠路のため大型船舶が寄港できない。三池炭坑の石炭は団平船で島原半島の南端・口之津港へ運ばれ、本船へ積み込まれていた。石炭荷役が与論人人夫の仕事である。積み込み作業は次のようにして行われた。

団平船と本船との間に道板を渡す。女は団平船の中で石炭を「かがり」と称するざるにかき込む。男は道板の上に二列に並び「ヤンチョイ、ヤンチョイ」と掛け声をかけながらリレー式にざるを本船へ送り込む。瞬時も手を休めることはできない。昼夜兼行の作業が3日も続くことなどしばしばである。疲れ果でて動きが鈍くなると2、3時間、甲板に仮眠させてから仕事に戻す。荷役の機械化はまだ行われていなかった。

反発するすべを持たない与論人人夫は、それでも黙々と苦役に耐えていた。炭塵にまみれた暮らしのなかで子どもだけが増えていった。

賃金は日給19銭で、給金がもらえない者にはサツマイモが支給された。当初、住まいには与論長屋が1棟与えられただけで、大半は近郷の農家の納屋に分宿させられていた。

後続の上野団長はこのありさまに激怒し、会社側に強く抗議した。

「これでは話が全然違う。与論人全員に電灯の付いた住宅を与え、生活を改善しないかぎり直ちに総員を与論島へ引き揚げさせる」

会社側は与論人長屋を増築したが、人夫酷使の手を緩めようとはしなかった。三井物産の人夫請負業者・南彦七郎は会社と与論人側の間に介在して、与論人の要求を握りつぶすとともにピンはねで私腹を肥やしていた。南の蓄財は十数万円に達した。上野應介と東元良の懸命のアピールやクレームは南に阻まれて日の目を見ない場合が少なくなかった。

与論人は土地の人とのコミュニケーションを持たなかった。言語、風俗、習慣、生活様式などの相違と島人の閉鎖性が障害になっていた。土地の人は与論人を「ヨロロン、ヨロロン」と呼んで蔑視した。与論人は焼酎をあおりながら島歌を歌って慰め合った。こんな歌が愛唱されていた。

「打ちじゃしより じゃしより、誠打ちじゃしより。誠打ちじゃし何恥じかちゅんが」

この歌謡は誠さえ守っていれば恥をかくことはないという島の伝統的倫理観を歌ったものである。上野は与論人の立ち後れに活を入れようと長屋の一部を改造して学校を開く。長崎師範を卒業した同郷人仁礼利英を招いて与論人子弟の教育に当たらせた。

#### 八、口之津を後にする

明治42年4月、大牟田に三池港が完成した。三池炭を口之津へ運び出す必要がなくなった。仕事を失った与論人約1200人は会社側の方針に従って三池港へ移るか、帰島するか二者択一を迫られた。

長屋内は騒然となった。上野は東と協力して、いきり立つ人々をなだめながら三池に移るよう勧めた。けつきよく、帰島希望者650人と三池行き希望者428人(家族を含む)に分かれた。そのほかは口之津に残ることになった。

上野は会社側に交渉して帰島者一人当たり十円の引き揚げ費用を支給させた。明治43年2月、帰島集団は三井の社船・爾靈丸で島へ向かった。三池行きの集団は上野と東に引率されて第三の故郷を目指して口之津を後にした。この日、すなわち明治43年1月23日が大牟田における与論村発祥の日である。

#### 九、三池で待っていたものは

三池集団は大型帆船で有明海を渡り、即日三池港に上陸し、三池郡三川町字川尻の与論長屋に入った。その日の夕方には与論人100人を作業に供出することになっていたが、入港時間の都合で翌日に延期された。一日でも休ませないという雇用者側の労働管理は徹底していた。

三池港での仕事は入港船への燃料の積み込み、港頭貯炭場での石炭の積み降ろしおよび選炭が主であった。船への積み込みは、接岸作業ができる点を除くと口之津での仕事と余り変わらない。与論人人夫は七組に分かれて輪番で仕事に出た。組分けは東組が末口、喜口、川口、上野組が伯口、定口、堅口、南組が藤口の合せて7組である。炭鉱の近代化が進められるなかで、与論人人夫には最も立ち後れた肉体労働部門が当てがわれた。こんな状態が戦後の昭和35年、企業合理化反対闘争が始まるまで続いた。

土地の人は与論出身の石炭荷役労働者を「ゴンゾウ」と、軽蔑的な呼び方をしてきた。島の人たちは肩身の狭い思いを余儀なく

されながら、「誠」という島の伝統的倫理観を護持・信奉し、会社側の冷遇・酷使に耐えていた。ちなみに、与論出身労働者の日給は男が28銭、女が19銭で、地元労働者の約半分であった。

上野應介は東元良を良きパートナーとして与論出身者の地位の向上、労働条件の改善、住宅の確保、内地人に劣等視されないための啓蒙と教育の普及に心血を注いだ。一方、会社側に対し与論出身者の利益擁護のために身を挺して闘った。会社側も上野の徳・人望と才覚、実績を高く評価してその処遇に配慮していた。

会社側の伝統的搾取政策の厚い壁を打破して、与論出身者が内地人労働者並みの近代的地位を獲得するまでには長い歳月と茨の道を通り越えねばならなかった。(1)陳事件や(2)三池争議などはそのための苦渋に満ちた試練であった。

注 (1)大正8年9月、三池港荷役主任陳種次郎に対する与論出身人夫の集団的制裁。

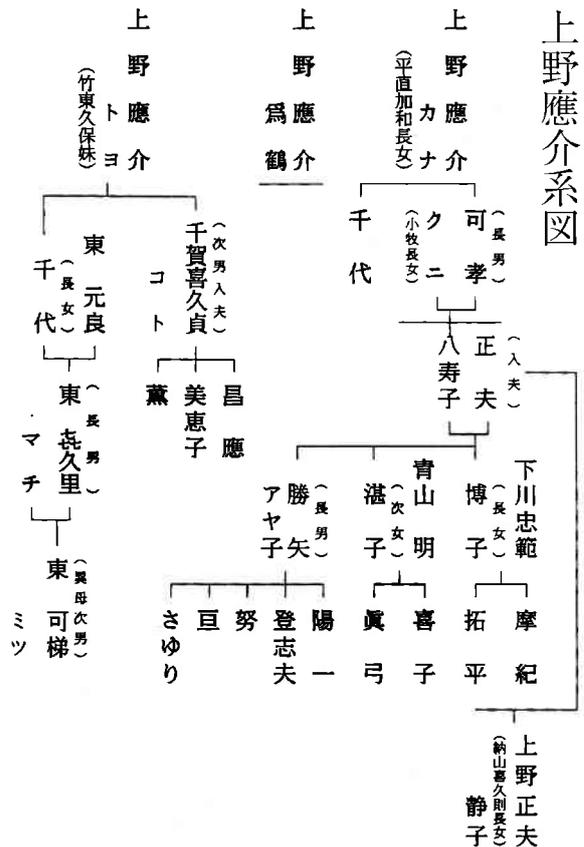
(2)昭和29年、与論出身人夫の113日の単独労働争議及び昭和35年1月に勃発した三池労使間の226日闘争。

大正2年、上野應介は四山(よつやま)船積与論人人夫総監督に任ぜられた。東元良とともに島民の統率者として団結と生活の中心となり、与論島出身者慈父のように敬慕されていた。

大正5年5月25日、大牟田市三池町にて病没した。享年63歳

この与論会だより巻末に記載しています『口之津移住百年祭記念誌―与論島から口之津へ―そして三池へ―』の内容が重複している箇所がありますが、ご了承ください。

上野應介系図



郷里与論島海岸にて  
左から孫 陽一・著者 上野正夫・  
妻 静子・長男 勝矢氏

## 口之津移住百年祭記念誌

与論島から口之津へ  
そして三池へ

与論組編成

☆

以上が郷土人が移住するまでの、口之津港の概略であるが、なお同町役所発行の資料の中から同郷人についての記録をひろってみると

……明治三十七〜八年戦役前後の口之津は、空前の盛況を呈し、石炭の輸出は毎月十萬噸を超え、全く他村をのむの好況となり、他に見られぬ楽天地を現出した。

このため石炭積込み人夫は、土地の者のみでは極度に不足を告げるようになり、人夫請負業者南彦七郎氏は三井物産会社の保護のもとに鹿児島県与論島、沖永良部島その他の島々から人夫数千名を募集して使用することにした。開田、大屋埋立地に長屋数棟を設け、収容して土地繁昌の一助とした……とある。

口之津は三井の港といっても過言ではないような様相を呈していた。その町の中心部には三井物産の口之津支店が占拠し、口之津の花柳界は三井によって私有されているような観を呈していた。日清戦争後の日本経済の飛躍の中で、それは産業革命の達成と、海外市場への進出という好条件の下で石炭産業はこの期をエポックとして大いに進展するのである。

年表で見たように、集団移住した明治三十二年二月は、口之津港は日清戦役以後、好況に向い、出入港船舶の増加で活気づいていた時機であった。

好況も明治三十七〜八年を頂点として、三池港の完成に伴ない、暫次下降線をたどっていくわけだが、そのことは後でたどることにして、集団移住第一歩を印した土地として、口之津はわれわれの胸に深く刻まれたゆかりの土地である。

三井三池鉦山の石炭の運搬およびその販売は三井物産が担当していたのである。

三池炭鉦の諸坑口から出される石炭は、団平船という伝馬船によって、口之津まで出し、そこから内地各方面および海外に向けて積み出されていた。それは有明海が浅海のため、容易に三池港をつくる事が出来なかつたためであった。このことは明治前期の官営当時においても同じであった。

註(同郷人の先輩で口之津時代の資料を、保管している人がいることを聞き、訪ねていったが、疎開騒ぎのなかで全部焼却してしまったということ、誠に残念であった)

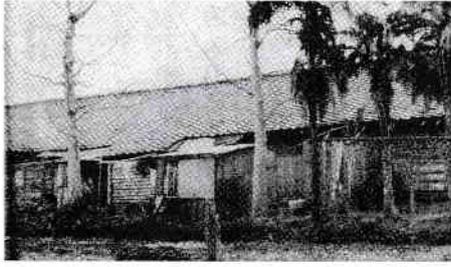
さて、口之津港の荷役は、大牟田川尻から回航してきた団平船から、貯炭場に担ぎ上げる作業と、沖に仮泊している本船に手繰り(ヤンチョイ)で積みこむ沖作業とに分れていた。

沖荷役はヤンチョイという名で呼ばれている作業方式で、本船の外舷に団平船まで順次に柵を組み、その柵の上に向き合つて二列に並び、団平船の中で女達が「カガリ」と称する小ざるに石炭をかきこんだのを、手繰りで送り積みこむのである。

そのときの掛声が「ヤンチョイサラサラ」と調子をとるところから、その名をとつたものである。

本船の繋留は、陸地に近い方から、第一、第二、第三と三つに分れ、第一で三百トン級の船舶、第二で七百トンから千トン級、第三は港外で大型船舶などが繋留される。

後に三池港に回航するようになった英国船の青筒大型船などの



南彦七郎が建てた与論人長屋

入港することもあったと云う。

本船が入港すると荷役道具を積んだ伝馬船に各組毎に分乗して、沖に仮泊している本船に向って、先頭を争って一斉に漕ぎ出す。

各組の屈強な若者達が「ヤツホヤツホ」と掛け声勇しく一番乗りを目ざして競り合う様は、意気旺んな風景であったという。

当時、一番褒賞というのがあって、最も早く作業を開始した組に、手拭や、番丁笠が賞として与えられていた。

労働者同士の競争意識をあげたて、作業の能率を上げさせる方式は、今も昔も変りない資本の労務政策の常道である。

大型船舶などの仮泊する港外は、瀬戸になっており、潮流が激しく、作業は困難を極めた。昼夜ぶつとうしの作業に、疲労と睡眠のために、誤って海中に転落し命を落す者もあったという。

口之津在住の、当時同郷人と沖仲士として、一緒に働いたことのある児玉という老夫婦は、資料拾集に向いた西脇仲川に与論人夫の働き振りを次のように語っている。

……あの頃の与論の人達は、余りにも馬鹿正直で、ぜんぜん反抗というものがなかったですよ。われわれ地元の方でさえ、全く見るに見かねる程でした。それで牛馬のようにこき使われたんですよ。私はそう思います。

……あの頃の与論の人達は、余りにも

馬鹿正直で、ぜんぜん反抗というものがなかったですよ。われわれ地元の方でさえ、全く見るに見かねる程でした。それで牛馬のようにこき使われたんですよ。私はそう思います。

与論の人たちには、二十四時間も仕事をさせるし、ひどいときには三日間連続という時もありましたよ。

積みこみはヤンチョイでしたが、人夫

の疲労がひどくなると、本船のデッキの上に眠らせることもあったが、出帆を急ぐ船になると、満船するまでは休憩を与えないこともありました。過労のため作業中ぶつ倒れる人もずいぶんありました。

当時寄港していた石炭船は富士山丸、彦山丸、頼朝丸、二〇三丸などの二、三千トン級の船が主でした。

石炭は三井のダンベエで運んできましたが、その外にも半農半漁の人で帆船を持っているのが、三池から運んでいました。

石炭は四斗樽一杯いくらというので、三井会社が買上げてい

ましたが、価格はもう忘れてしまいました。

作業監督者として大牟田からお役人が出張してきましたよ。お役人達は口之津で一番上等の旅館に泊ってそりゃ豪勢な遊びをしていましたなあ。そしてなかなかの権力者として幅を利かしていました。

土地の人で南彦七郎という人が、与論人夫を使っていました。ずいぶん儲けましたよ。口之津では有力者の一人でした。……

と語っている。なお同郷人の生活の実態についてこう語っている。

……仕事の合間に附近の山畑を耕作して、さつま芋や野菜をつくり、さつま芋を常食にしておりました。家畜として豚や山羊も飼っていました。

沖荷役で大型船の場合は帰宅しないので、陸からテンマ船で、食事を運んでくるわけですが、さつまいものふかしたのをザルに入れ、味噌を丸めたのを葉っぱに包んで、おかずとしてかたわら

……仕事の合間に附近の山畑を耕作して、さつま芋や野菜をつくり、さつま芋を常食にしておりました。家畜として豚や山羊も飼っていました。

沖荷役で大型船の場合は帰宅しないので、陸からテンマ船で、食事を運んでくるわけですが、さつまいものふかしたのをザルに入れ、味噌を丸めたのを葉っぱに包んで、おかずとしてかたわら

……仕事の合間に附近の山畑を耕作して、さつま芋や野菜をつくり、さつま芋を常食にしておりました。家畜として豚や山羊も飼っていました。

沖荷役で大型船の場合は帰宅しないので、陸からテンマ船で、食事を運んでくるわけですが、さつまいものふかしたのをザルに入れ、味噌を丸めたのを葉っぱに包んで、おかずとしてかたわら

に入れてありましたよ。

子供達は終日、海や、山をかけまわって遊び、汚れたままの着物で、親も子もゴロ寝していました。地元の人達のかげ口では、豚小屋と云っているくらいでした。

入港のない夜は、藁を抱えて一ヶ処に集まり作業のわらじを作りながら、三味線、太鼓で賑わい、島の民謡を唄って労苦を慰めていましたよ。……

ずいぶんひどいものである。古老の語るところによると、当時は出勤一方に対して芋七分外米三分の配給があり、塩、味噌、醤油、薪等も通帳で購入していたので、差引き、受銭もわずかなものであった。当時を回想して端的に「天草辛くって、糞たれかぶって、頑張ったものですよ」と高笑いした。

住居は長屋で、中央に通路があり、両側が向き合った部屋になっており、勿論畳などなく、板張りにゴザを敷いたものであり、カンテラを吊り下げ、そのうす暗い灯影の下で貧しい夕餌を囲んでいる家族の姿を思い描くと胸の痛む思いがする。

☆

与論人は従順で勤勉なのだが、新入りということで格差がつけられ、仕事が一人前に出来るようになって、他の仲間よりも賃金が安かった。

故郷を出るとき聞かされた話と、待遇がひどく違っていることに対する不満が、次第に表面化し、暗い前途に失望して、口之津の生活に見切りをつけ、逃亡する者が増えてきた。

動揺が高まりつつあった或る日、もっとも不幸な事態が突発的

に発生した。

それはコレラの大流行であった。本船の荷役中感染したもので、まるでりょう原の火のように蔓延し、多くの働らく人達や、家族が罹病した。

医療設備も充分でない当時のこととて、予防法も手が届かず、蔓延を恐れてまだ息をひきとっていないのに、そのまま火葬するという悲惨なものであった。

見る人とないうす暗いカンテラの下で、高熱のため水を求めうめき、のたうちまわっている長屋の様は、まさに地獄絵図そのものであったという。当時の犠牲者を葬った与論人墓地があると聞いている。

こうした悪疫の流行は、浮き足たった人々に踏ん切りをつける契機となった。

門司、若松方面に出稼ぎに出る者、船員に転ずる者、帰郷する者、最も集団的に転出したのは、熊本県の八岳トンネルの開さく工事であった。一部三池港の開発工事にも出ている。

労働条件の不満と、爆発的なコレラの蔓延によって、第二の故郷建設の構想は、島民の離散で崩れ去ろうとした。

そこで東元良、梅花孝森ら幹部は、南彦七郎をまじえ協議の結果、与論島より第二回目の募集を行うこと、与論島出身者だけで組を編成すること、そのためには作業に慣れた人びとを連れ戻すこと、つまり集団転出した八岳トンネル開さく工事に奔った人びとを説得して復帰させることなどが決められた。

東と梅花が八岳トンネルに向かうことになった。当時は炭鉱のタコ部屋がそうであったように、出稼ぎの重労働者は、飯場に押しこめられ、暴力団みたいな連中の厳重な監視のもとに酷使され

ていたのである。

派出所の巡查までが、人夫の逃亡を防止するための役割を果たしていた時代のこと、若しその策動がばれるようなことになれば半殺しの目にあわされる。

烈々たる郷土愛に燃える両名は、頭を剃り坊主に変装して、現地におもむき、もぐりこみに成功した。

転出の同郷人に口之津への復帰を訴えた。内地の人が聞いてさつぱりわからない島の言葉で相談が出来たのが好都合だったと思われる。

郷土愛の熱意にうたれた人びとは復帰することに同意し、仲間へに気づかれないように手筈を整え、豪雨の夜脱走を執行した。

脱出に成功した一行は、鹿兒島港より回航した第二回移住団を乗せた船に便乗し、再び口之津港に帰ってきた。

### ☆

三池炭鉱の出炭も年を追うて増大し、口之津港における取扱量も増大し、海外、特に上海への輸出が活発になり大型船の入港も数多くなった。

従って昼夜ぶつとうしの労働が続くようになり、人手不足から第三次、第四次と募集が行われ発展の基礎が拡大されていった。明治三十四年代は上野忠介戸長も勇退して、自ら移民四〇〇人を引率して渡航された。

第二の故郷として与論人が立派に栄えていることを胸に描いて、上陸された翁は、島民のみじめな生活の実体を眼のあたりに見て、大いに怒り、早速会社及び南彦七郎に、待遇改善を強硬に申入れ

た。

農家の納屋に分宿している島民を、直ちに長屋を建て増しして収容すること、カンテラをやめて、電灯をひくことなどを迫った。若しこの要求が容れられねば、島民全員を引率して帰島すると決意の程を披瀝した。

強硬な申入れに慌てた南彦七郎は、直ちに十間長屋を数棟建て島民を収容したということである。

翁は将来の発展のためには、子弟の教育が最も大切であると、大屋の長屋の一部を改造して同郷の仁礼利英先生を大島より招き、学校を開設した。

生徒は奄美大島の児童のみを集めた。

南彦七郎監督の下に与論組を編成し新しく発足してから、上野、東を中心に団結し、家族的な雰囲気の中で、ともに扶けあい励ましあつて、作業に馴れるにしたがつて他の組々を抑え、頭角を現わすに至った。

なお与論の各組に作業教師として地元の有力量を一名づつ置き、二人前の賃金を支払ったということである。

何しろ気の荒い沖仲仕のことだから、作業段取りの競り合いから、乱闘騒ぎもしばしば起つたらしい。そのとき力自慢の柳田鎌当の当を得た任侠的処置によって、同郷人の場合事なく問題を納めたこともしばしばで、多くの人びとに感謝されていたということである。

このような経過を経てようやく与論口の編成を中心として、第

二の故郷づくりはその基盤を確立したようだ。

数回の募集によって、口之津の最盛期には、与論島民は家族を含めて千二百二十六名の多きに達したと記録に残っている。

口之津に集団移住したのは、与論島民だけではなかったのだが、集団的に定着したのは与論島民だけであった。

このことは島民の忍耐強さと、相互扶助の精神を中核とした団結力を示すものであるが、半面それ程孤島における生活が困苦に満ちたものであったことを物語っている。

開拓は常に偉大な指導者と貧しい者との結束によって進められてきた。

### 三池移住

明治三十二年末からはじまった三池港人工築造計画が、明治四十一年三月に完成した。

三池港の完成に伴い、これまで口之津港において荷役をしていた汽船が、ほとんど三池に回航するようになり、口之津港では単に大型汽船の焚料積み込みだけになった。

此処にはじめて口之津の荷役人夫の余剰人員整理の問題が起ってきた。

三池移住をたどる前に、明治三十五年に着工した三池港の人工築造について、三井鉱山八十年抄史(くろだいや新聞所載)より拾ってみよう。

築港の必要は官営時代から叫ばれ、フランス人技師の設計になる立派な三池築港計画が作られていたが、何しろ干満の差が十八

沢にも及び、二湊の遠浅だけに難工事とされ、実現を見ないままになっていたが、出炭はふえるし、海外特に上海への出荷が、大牟田川で船積みして、島原半島の南端の口之津港を経て積出すのでは不便もさることながらトン当り一円以上の経費がかかり、どうしても築港して(これでトン当り八十銭節減)直接三池から船積みしなければということになった。

そこで明治三十二年五月から四ヶ月間、四ツ山沖の深浅測量が行われ、築港計画の議が熟し本調査にかかったが、この調査は地元関係者を考慮して極秘裡に陸地を避けて、団琢磨・牧田環の両氏のほか四名が団平船に乗り、大牟田川、諏訪川、大島川の各川尻を調査、ボーリングによる土質調査も行い、種々検討の結果、最初大島川尻(現四ツ山坑南側)が有望視されたが、結局四ツ山の現在地に決定をみた。

有明海沿岸一帯は、泥洲の連なる遠浅海岸で、干満の差がひどく、本築港予定地も勿論港湾の地形をしているわけではなく、一般築港の場合と異なり、必要な水深の沖合に新港区を設けて陸地と連絡するか、あるいは海岸近くに新港水域を設けて外海との連絡は海中運河によるほかはないのだが、この場合は後者がとられた。

すなわち、まず三川付地先海面約三十六万坪を埋めたて、この内部に水面積三万七千坪の船渠(当時の内港)を掘りぬき、開門と接続航路を通じて面積十五万坪の内港(当時の外港)に連絡、船渠の外側三十万坪は貯炭場、新市街などにあて、更に延長約千間の航路によって外海に通ずる計画であった。

築港の位置選定後、明治三十二年末から三十五年三月までは試錐、潮流測定、その他測量調査が綿密に行われ、同年十一月の天

長節を期して鍬入式が行われた。

工事はまず埋立地潮止め石垣工事に続いて、防波堤捨石を開始一年半後、潮止め石垣の完成をまつて繋船工事にうつり実に五年有半の歳月を要して、明治四十一年三月諸工事もほとんど完成し、三月十四日船渠内に入水を決行、同二十五日内港、船渠の海水連絡がなり、四月一日三池港と命名、開港された。

これに要した総経費は約三百七十六万円、延人員二百六十二万人で、たまたまこの期間は、日露戦争中だったので、物資労力の面での苦労はひとかたならぬものがあつた。

口之津港における、労働条件に不満を抱き、同郷人の中には三池港の築造工事に奔つた者もあつたという。

### ☆

三井物産は、特に奄美大島各島より移住の人夫の処置に慎重を期し、四十二年に三池炭鉱と交渉の結果、口之津に必要な人員を残し、帰島を希望する者には旅費を支給して帰し、残りを三池に移住させることになった。

会社は発表に先立って上野、東の両氏を三池港に派遣して現地を視察せしめた。

前に述べた通り口之津港における与論島民の作業実績は群を抜いていて、両氏を中心に家族のように結びつき、従順で、誠実な労働を提供していたので、会社はこの労働者を確保したいということ、両氏を通じて三池への集団移住の働きかけを行った。

余剰人員整理の問題が起ると、日頃ねじふせていた不満が、これを契機に爆発したかのように連日大論争が展開された。

それは、どんなに働いても唯食うだけが精一杯で、故郷への送金どころか、貯蓄も出来ない。島で募集のとき聞かされた話と食い違っている条件に憤慨したものである。

大勢は三つに分れた。

あくまでも上野、東の指導者を中心として、三池の地に第二の故郷を建設すべきであるとする移住組と、せつかく口之津の生活に慣れたのに、今更三池に行つて苦勞することもあるまい。何処へ行つても同じ石炭仲仕なら、慣れた処がよいという残留組と、此の際見切りをつけて帰郷しよう。裸一貫で出てきて、十年経つた今でも裸一貫じゃないか。これでは何のために遙々海山越えて出稼ぎに来たのか意味がない。前途の見通しの暗さに失望した帰郷組とに分れ、昼夜論議がかわされた。

当初は帰郷を希望する者が圧倒的に多かつたということである。

三池港を視察してきた上野、東の両氏が、説得大いにつとめた結果、次第に三池移住へ踏みきる者がふえてきた。

一、新築の社宅があること。

一、港の設備もよく、仕事も楽である。

一、学校もあり子弟の教育も心配ないこと。

などの条件をあげ、更に郷土の宿命を説き、子孫繁栄のため、三池の土地に第二の故郷を築こうと訴えた。

解散に動揺した人びとも、熱誠あふるる訴えに、ようやく移民を決意するに至つた。

第二の故郷をつくるという熱意は、その後ながく同郷人の心の支えとなつた。

記録によれば、三池に移住した人員は家族を含めて四二八名で、そのうち稼動者が二九二名となつている。



昭和32年11月 新港町倶楽部にて  
口之津思出を語る古老者座談会参列者

帰島組については、村役場の記録に——これら帰島者は一人当たり十円を支給されて、三井の船で帰郷し、供利港より上陸した——とある。

明治四十三年一月二十三日、十年余を暮らした口之津を後にして、四二八名の集団は、新しい職場に向かって、第二の故郷づくりのため再出発した。同郷人に乗せた大型帆船は、海上つつがなく三池港一番バースに接岸、上陸後、小屋にて小憩、用意された長屋(当時三川町中野関川尻)に全員収容された。

翌二十四日から早速就労している。日報に左の記事がある。

日 報

明治四十三年一月二十三日、午前六時三十到着、タダチニ新築長屋ニ収容ス。

午后五時ヨリ三組オヨソ百人出勤ノ旨港務所ノ通知ニ接シソノ準備終リタルトコロ、サラニ入港船ノ都合ニテ明二十四日ニ変更ノ通知ニ接シ出役ヲ中止ス。

日報にてわかるように移住をしたその日に作業の繰込みを行っている。入港船とにらみ合せて移住させたのかも知れない。幸い入港船の都合で取止めになつたらしいが、その夜は引越し祝いで賑つたことだらう。

かくして口之津において十年余の辛酸をなめたあげく大牟田の一角に第二の故郷建設の第一歩を踏みだしたのである。

明治時代を終るに当たつて、口之津港で苦闘され、今なお健在で、昭和三十六年四月九日に行われた三池移住五十周年祝賀会において、功労者として表彰を受けられた古老の氏名を左に記して置きます。

氏名	年令	氏名	年令
池田福明	81	有元ウシ	79
池田オク	82	仲野ウト	71
山田峰富	82	竹野ハル	68
山田ウシ	76	堀ウトル	77
田畑富森	79	朝岡チヨ	79
田畑チヨ	75	和泉ト	69
山田金池	74	川南カメ	75
山田ウシ	73	武南マツ	71
角原利	86	黒田チ	73
竹喜美福	74	與田ナ	69
有元治沢	83	黒田メ	71
供利秋	73	大山メ	73
梅花喜久奥	70	大林カメ	73
兼屋里仲	69	西林カメ	73
松田喜佐道	71	川上メカ	78
竹田森里	71	徳田ウシ	67
吉田喜見児	80	田畑ウシ	70
武田ツル	84	角田ウシ	67
赤瀬モチヤ	83	竹内ウゴ	73
吉川エク	79	竹内マゴ	71

次回へつづく

## 令和4年 大牟田・荒尾地区与論会予定表

令和4年1月1日～令和4年12月31日

月	日	曜	行事	要項
1月	3日	月	奥都城初詣	開館時間 午前10時～12時
3月	27日	日	奥都城清掃	3・5地区担当 午前8時開始
4月	3日	日	奥都城春季大祭	祭典開始 午前10時
5月	8日	日	奥都城清掃	6・15・16地区担当 午前8時開始
	未定		与論中学校修学旅行	交流会(奥都城前広場)
6月	12日	日	奥都城清掃	4・10・11地区担当 午前8時開始
7月	未定		第46回与論会定期総会	与洲会館 未定
	10日	日	奥都城清掃	13・14地区担当 午前8時開始
8月	13日	土	奥都城お盆	開館時間 午前10時～12時
	14日	日	奥都城清掃	17・18・19地区担当 午前8時開始
9月	11日	日	奥都城清掃	1・2地区担当 午前8時開始
	18日	日	奥都城秋季大祭	祭典開始 午前10時
10月	9日	日	奥都城清掃	12・20地区担当 午前8時開始
11月	13日	日	奥都城清掃	7・8・9地区担当 午前8時開始

奥都城清掃当番の日時は忘れずに印を付けて下さい。

手袋は用意してます、使用後はお持ち帰りください。

お茶菓子を用意しておりますので最後までのご協力をお願いします。